大学出版

'94 秋

No. 23

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
23号

Fall · 1994

読書の周辺　電子出版におけるCD―ROM ―――― 堀内　道夫　1
読書の周辺　本と資料の分類 ―――― 横山　正　5
AAUP総会に参加して ―――― 山下　正　9
定年と趣味 ―――― 高野　昭吉　13
大学出版部ニュース ―――― 15
新刊案内'94・7～'94・9 ―――― 21

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

読書の周辺

電子出版における CD－ROM

堀内 道夫
（日本電子出版協会副会長）

●電子メディアCD－ROMの出現

一九八二年に、音楽用CDが商品化され、またたくまに爆発的な普及を示し、従来のアナログレコードの売上高、出荷枚数、新譜数を凌駕した。

この普及の要因は、CDが音楽信号をデジタル情報として記録しているために、アナログレコードにはない小型で高密度大記憶容量を実現していること、また、半導体・光学部品の低価格化によるところが大きかった。

また、CDの持つ耐久性・量産性・経済性および信頼性に注目して、音楽情報だけでなく、デジタル情報としての文字・画像情報の記憶媒体としての利用効果を期待して、一九八五年に「読み出し専用」のディスクとして開発されたのがCD－ROMである。これは、基本的には音楽再生用のCDの製作技術を利用できるものである。このような経緯の中から、CD－ROMは情報要素である文字・画像・音声などを混在できるメディアとして、単に文字だけ、画像だけといった既存のメディアとはまったく異なる新しいメディアとして登場してきたのである。

現在、CD－ROMは、磁気式または光学式記憶形態の中で高い信頼を得ている。それに加えソフトウェアの特許侵害の可能性をも減少させている。

我が国でのCD－ROMによる最初の電子出版物は、筆者の提言により一九八五年に三修社から発刊された「最新科学技術用語辞典CD－ROM版」である。

なお、一九八六年九月には、出版社・印刷会社・コンピュータメーカ・ソフトメーカ・情報媒体の企画制作会社など様々な文化や歴史を持つ業種・業態の企業・人々が参加する横断的な集まりの日本電子出版協会（JEPA：Japan Electronic Publishing Association）が発足した。電子出版物、各種情報媒体の企画・編集、製作者が直面する諸問題の解決を目的に、著作権、流通、システム標準化、マルチメディア出版、ICメモリーカード出版などの活動を行っている。会員社数は一七二社（一九九四年七月末現在）である。

●CD－ROM誕生の背景

なぜ、急速にCD－ROMが注目され、普及し始めたのか。その背景にはコンピュータによる電子編集の導入・発展がある。

まず、日本では大手新聞社を中心に一九八〇年前後から、新聞製作の合理化・迅速化のために、文字や図形情報をコンピュータに入力し、編集・組版・印刷する電算写植システム（CTS：Computer-Typesetting-System）が急速に普及した。

また、大手印刷会社を中心として、書籍を出版するために文字のデジタル化、印刷工程の電子化、情報の加工処理が進展していた。出版社においても、ワードプロセッサ、デスクトップ・パブリッシング（DTP）などの電子編集技術が導入され、電子的データベース構築が広く普及し、日常的に使用されるようになってきていた。

その結果、文字の電子化という作業が、従来の伝統的な印刷物「紙媒体」のためだけでなく、広くコンピュータメディアとしても適用されることとなり、コンピュータメディアと印刷メディアに共通する入力仕様となってきた。

したがって、印刷物として出版されたデータは、すべてデジタル化され、紙媒体だけで存在するのではなく、データベース化し、オンライン利用することも可能となってきており、同様に、すでにデジタル化されているデータに検索に必要な加工、編集処理を行い、多様なアクセス・ポイントを持つインデックスを付加することにより、データベースをCD－ROMで提供することも可能となった。

●電子出版の現況

電子メディアにつながる出版物は、一般的にはニューメディア商品として位置づけられている。市場として構成される要素は、カセットブック、CDブック、ビデオ・マガジンなどである。これらは現状では大きな市場となっているわけではないが、その中に電子出版が位置づけられている。

電子出版の「電子」はコンピュータを意味するが「出版」は出版界のための最適メディアとして、ここにアクセントを置いたのである。ICカードや他のメディアも多々あるが、その中で特にCD－ROMが注目されているのである。

これは数百メガバイトの情報を扱うには最適のメディアであり、従来の出版物における紙と同じ立場にある。つまりパピルスの発明に匹敵することを認識してほしい。ますます情報量の増大する現代では、当面このメディア無くしては流通が不可能といっても言い過ぎではないと思う。

現在、国内で販売されているCD－ROMのタイトル数は、依然増加傾向を続けているが、特にここ一年は急速に増加している。これは、CD－ROMドライブの出荷台数の急増とCD－ROMドライブ内蔵のパソコンの増加と同時に、アップル（マッキントッシュ）、サン、ヒューレット・パッカード（HP）など、OS（基本ソフト）をCD－ROMで提供するケースが本格化してきたことによる。また、売上枚数において、オーディオCD並みのゲームソフトも最近登場してきたことも大きな要因となっている。

現在、日本において発売されているCD－ROMのタイトル中、電子出版は高い割合を占めており、CD－ROM

による電子出版は出版の一つの分野として認識されており、電子系メディアの創成期といわれる現在、着実に市場形成へと進展している。

●今後の動向

ＣＤ－ＲＯＭの登場は、出版・情報サービス産業にとって、電子出版・情報ビジネスを考える大きな節目となった。これまで種々の記憶媒体が世に出てきたが、一九九〇年七月にソニーより発売された「データディスクマン」は、ハンディなサイズで、しかも表示内容と出版物との親和性が高いことから、多くの既存の出版物のＣＤ－ＲＯＭ化が行われることとなった（現在、約二〇〇タイトルのソフトが国内で販売されている）。これは、初めての一般ユーザ向けＣＤ－ＲＯＭプレーヤということで、家電店、書店に流通し、ＣＤ－ＲＯＭあるいは電子出版の普及に大いに貢献した。

また、フロッピーディスクを電子出版のメディアとしているが、一九九三年十一月にＮＥＣより、フロッピーディスクで本を読むというキャッチフレーズで「デジタルブックプレーヤ」が発売された。出版ソフト（デジタルブック）も発売時約三〇タイトルが用意されており、一九九四年二月には一〇〇タイトルを計画していた。

富士通においても、ＩＣメモリーカードを電子メディアとした携帯型の電子プレーヤを準備・検討している。

このようなハード機器・システムの登場・普及は、情報

データディスクマン［ソニー］

電子ブック：現在，辞書・専門用語集，語学学習，各種ガイドブックなどを中心に，国内では約200タイトルが入手できる。［撮影協力：国立国会図書館］

デジタルブックプレーヤとデジタルブック：現在，文学や実用書を中心にソフトの充実が図られている。［撮影協力：国立国会図書館］

洪水の現代における必然的産物にほかならない。今後とも、絶え間ない技術革新の波は、新しい道具を世に提供していくことに違いない。

しかし、溢れる大量情報の中、いま個々のユーザは、情報に対して従来とは異なる態度を取るようになってくるのではないだろうか。本当に自分に必要な情報だけを選択し、保存し、編集し、再利用し、破棄することが可能なものを望んでいる。そのような情報内容、提供の仕方、コストが問われている。

一九八〇年代後半からアメリカ、日本のみならず世界中でマルチメディアという言葉が、頻繁に使われるようになってきた。しかし、マルチメディアという言葉も各人各様に定義しているのが現状である。いずれにしても、マルチメディアは情報を伝達するメディアが多様になり、コンピュータで映像・音声・文字などのメディアを複合し一元的に扱うことで、デジタルメディアの発展を集約するものとして、大きな期待が寄せられている。出版・情報サービス産業にとっても、電子出版・電子情報サービスとして定義された内容の本質は、マルチメディアと共通する点が多く、対応可能なものである。

この市場に出版・情報サービスとして蓄積されたデジタルデータを編集加工し、メディア変換して商品投入していくことは、疑いないことであり、出版産業も情報サービス産業も、マルチメディアは商品拡大の面で注目に値するものと考えている。

また、今後デジタル通信・デジタル放送の環境が整えられることによって、電子出版の未来も大きく広がってゆくだろう。しかし情報量の増大とともに高品質が要求されるため、いずれCD－ROMでは満足できなくなる。その時はまた人類は新しい媒体を開発するであろう。次の世代の人達が開発することが無くなってしまっては、可哀相ではないか。

国立国会図書館の「CD－ROM閲覧コーナー」：現在CD－ROMが約60タイトル，電子ブックとデジタルブックがそれぞれ約90タイトルづつ閲覧に供されており，毎日数十人が利用している。［撮影協力：国立国会図書館］

読書の周辺

本と資料の分類

横山　正
（東京大学教養学部情報・図形科学教室）

自分の蒐めた本を書棚にどう分類して並べるかは、おおよそ世の平均以上に本を所有してしまった者のひとしく悩むところであろう。ごくきまった範囲のものを蒐めている場合にはそれでもまだやりようがあるように思うが、私のように、いちおう建築を中心とする空間構成の歴史を対象としていて、さらにそれに関連する各分野のものまでということになると、演劇はもちろん、神話、音楽、各時代の文学、哲学と、もうとめどなくなってしまって、これを書棚の中に体系立てて収めるのは至難のわざである。UDCやNDCの分類法があると言っても、あれは世の中のいかなる本にもアドレスを付け、どんな本を捜す人にも対応するためのシステムだから、私のような場合には無駄もあるし、第一、不便である。外国の例を見ても、特殊な本の蒐めかたをしている図書館は、ヴァールブルク研究所にせよ、あるいはローマのビブリオテーカ・ヘルツィアーナにせよ、それぞれ独自の分類法を造り上げている。

私もいつかは自分の蒐めたものを図書館として公開する夢を持っているので、アヴィ・ヴァールブルクがやったように、蔵書を何とか体系づけて分類しておかなければならないと思っているのだが、彼のようにいちいちカードをとる几帳面さはないし、助手を雇う余裕も無いから、どうしてもいい加減になる。それに、一冊の本はいろいろの貌を持っているから、それをどれかひとつの分類に容れ切ってしまうのは難しい事が多い。馬に関する書籍のコレクターである木下順二さんがその分類の悩みを書いておられる文章を拝見したことがあるが、しかし木下さんの場合には、一冊の本について、書名、著者名、年代、分類の四枚のカードをつくっておられるようなので、これならどこに分類されていても、何かの手掛かりから目指す本にアプローチ出来る。でも私のようにいっさいそういうものが無しだと、最初どこに入れるかが問題で、これを忘れてしまうと、極端に言えばまったく偶然にしかその本にめぐり会えなくなってしまう。

しかしそうは言っても、とにかく何か分類をしておかなければ本は捜せないから、いちおうの体系は造りあげている。私の場合、それも建築や庭園など空間構成の問題に関わるものについてのことで言えば、地域と主題の二本立てということになろうか（アヴィ・ヴァールブルクはまず主

題、ついでそれを時代、さらに地域という三段階分類法を採ったようである)。近代をのぞく日本、中国、イタリアが地域の大どころで、あと、旅のたびごとに、イラン、トルコ、インド、韓国、マグリブといったふうに次々と地域ごとのまとまりが出来ていく。もちろん日本や中国の場合には、さらに主題別に分類していくわけで、日本の場合だと、建築や都市をめぐる細かい分類のほかに、いけばな、茶道、庭が大きな分類項目になっている。イタリアの場合は、アーティストはアルファベット順に整理、それにルネサンスやマニエリスム、バロックなどの時代ごとの分類、ローマ、フィレンツェなどのような都市ごとの分類、ネオ・プラトニズムやキルヒャー、ルネサンスの音楽、記憶術などの特殊項目と、やや変則的になっている。

こうした地域別の分類のほかに、前に述べたように主題別の分類があって、ユートピア、庭園、透視図法、劇場、古代からバロックにいたる原典のリプリントや校訂本といった主題を設定したうえで、またそれぞれの内容に応じての分類を行っている。庭園では地域別に、また原典については背の高さで書棚を分けてその中で著者のアルファベット順にといった具合である。ただし日本の庭園は地域としての日本の部に入れてあって、主題別の庭園のほうには入れていない。これは中国も韓国も同様であり、この場合の判断基準は落ち着きの良さということに尽きよう。横文字の本が並んだなかに漢字やハングルの背が混じると、文字の違いのせいもあって、何かごたごたするのである。地域、主題ともにまだ記していけばきりが無いが、要するにこんな具合で、全体をつらぬく一貫したシステムというものは無い。ただ自分が蒐めた本について言えば、この分けかたは大変うまく行っていると思っている。もちろん前にも述べたように、それぞれの分類の境界はかなりあいまいで、一冊の本をどこに入れるかについて迷うのはいつもなのだが、しかしこれは分類という行為がもつ宿命のようなものであろう。おそらくこれを公開して一般の用に供するときも、やはりこのままがいちばん良いのであろう。もっともヴァールブルクの文庫を任されたフランツ・ザクスルがアビィ・ヴァールブルクのかなり主観の強い分類をややゆるめて使い易くしたような手直しはきっと必要と思うけれども。

さて本の分類についてはこういう訳であまり誇れることは無いのだが、ひとつこれは少し自慢してもいいかと思うものに、本以外の資料の整理がある。知人から貰った論文、旅の途次に溜まった地図や宿屋のカード、絵葉書、手紙、切り抜き、小冊子といったものを皆さんはどんなふうに整理されておられるだろうか。私はどちらかというとものを溜めるほうなので、以前はこうしたたぐいがあっという間に積み上って呆然としていたものだった。時々、主題別のファイルをつくってみるのだが、それにおさまってくれるのは少数で、引出しや机辺にそれ以外のものが山を

つくるのは変らない。

そんなある日、突然ひらめいて始めたのがまったく何の区別もしないまま、ちょうど辞書の項目のように単語を並べたファイルをつくってそれに資料をおさめていく方法である。はじめカタカナ見出しにしてアイウエオ順にしたが、すぐ横文字ものをカナ表記にする愚に気が付いて、英語を原則とするアルファベット順に切りかえた。もちろん日本語でしか表現出来ないものはローマ字表記にする。ファイルはB4のボール紙2つ折の右肩に山が付いただけのもっともシンプルなものにした。いっさいこれにおとし込むだけである。もちろんハンガーも何も使わない。このファイルはいちばん安価だし、ある項目が不用になれば、その上に市販の裏に糊の付いた白ラベルを貼って何度でも使えて経済的である。私はノートやファイルはすべてA4の四つ穴に統一しているのだが、ことこのファイルに関してはB判が便利である。A3では大きすぎるしA4は小さすぎて不便、その中間のB4というのはこういう何でも放り込むファイルに最適である。

このファイルの肩にはそれぞれの項目名をアルファベットで記す訳だが、ここにひとつまた私の工夫があって、項目の内容によって色分けをするのである。一般の普通名詞については赤、固有名詞のうち、人名はグリーン、地名と建物名、庭園名などはブルー、作品名は茶、組織名は黒という具合で、全部で五色である。これも長年のあいだにつくり上げてきた方法で、ほとんど自分では完璧とおもっており、このファイルだけでなく、スライドのファイルなど、あらゆるタイトルにこの色分けを用いている。近ごろは色テープにたやすく印字出来るものが出来たから、ときどきそれを使うこともするが、まるっきりそれに頼ることはしない。能率が悪くなってつい整理がおっくうになるからである。やはり五色のサインペンを用意しておいてそれで書込むのが簡便で良い。もちろん項目は内容によっては二段にわたって記すので、上の段にブルーで「LONDON」、下段に赤で「MAP」といった具合である。日本語の場合には「KYOGEN 狂言」というふうに、右に漢字を添えておく。建物や庭の場合は、第一段が地名、第二段が建物や庭の名となる訳だが、私の場合、関西の建物のファイルが多いから、「KYOTO」や「NARA」の項目に異常なファイルの集中がおきないように、京都と奈良の建物や庭に限っては、地名でなくいきなり建物名や庭園名で項目にするといったルールが決めてある。

これで準備は出来上がりで、あとは旅先で蒐めた資料、雑誌から引きやぶいた面白そうなエッセイ、いただいた論文などを、ファイルをつくってぽんぽん放り込んでいくだけである。論文を個人名と主題のどちらでファイルするかは、そのときの判断によることにしていて、どうしても忘れそうなときは一方のファイルに参照のメモを入れている。もちろんしょっちゅうひもとく要のある目下かかわり

合っている内容についてのファイルはべつで、これは前述のA4四つ穴ファイルがたくさん机辺にあってそこに綴じ込まれている訳だが、ひとたびその役が終ると、このアルファベット順の大ファイルのどこかにおさまることになる。こんなことを繰返ししているうちに、いまやB4四段のファイリング・キャビネットが十七本も並ぶ始末になってしまった。いまでは書棚の分類のどれにもどうしてもおさまりそうのない本、あるいはあまりにも薄かったり小さかったりして書棚の海のなかに呑み込まれてしまいそうな本、特殊なテーマについての本もこのファイルにおさめるようにしているから、大したことはないが古本屋さんの少し喜びそうな本は、書棚よりもむしろこのキャビネットのなかにある公算が大きい。集って来る資料をこのファイルに分類し収納していく作業は大変だが、他人には頼まずなるべく自分自身でやるようにしている。ある資料が間違ってべつのファイルに入ってしまったら最後、ほとんどその発見は絶望的だからである。

さてこうやってファイルを造っていくと、次々に思いがけない項目が並び合って、それを眺めているだけでも面白いときがある。トマス・カーライルのはじめたロンドン・ライブラリイの歴史を書いた本がさきごろ翻訳されたが、それを見ると、アルファベット順を重視したチャールズ・ハッグバーグ・ライトの発案らしい三階の「その他」の項目の羅列が、まさに私のファイリング・キャビネットそっくりである。いわく「BALOONING」、「BATHS」、「BEE-KEEPING」、「BEER」、「BELLS」……。

私はこのアルファベット順のファイルを「わが百科事典」と呼んでいるのだが、これを始めてからずいぶん捜しものが楽になった。今回この文章を書くについても、「LIBRARY」、「ROMA/LIBRARY」、「HORSE」（乗馬法の本や、馬をあしらったデザインについてのエッセイとともに、木下さんの『ぜんぶ馬の話』の文庫本と、それを踏まえて雑誌に書かれた「もう一度馬の話」のコピイが入っている）、「NOTE」などのファイルを引き出して記憶を確かめている。「HORSE」のファイルは以前はもっと豊かだったのだが、私のところの大学院生で馬に夢中のひとが居たので、彼女にいろいろ資料を譲った結果、少し淋しくなってしまったのである。このようにこのファイルの内容はときどき思いがけない贈物となって相手に大変喜んで貰えるという徳もある。本のほうもこのキャビネットのごとくに簡単に整理出来るとありがたいのだが、そうならないところがまた本の本たるゆえんであろう。かくして私の机辺には、しょっちゅう新しい分類を試みてはまた崩す本の棚と、何が来てもあざやかに収納しけっしてシステムを崩さないキャビネットとが、まさに私の思考と行動の二面性を象徴するがごとくに共存しているのである。

AAUP総会に参加して

山下　正
（東京大学出版会）

Ⅰ　はじめに

この四か月間のうちに、ヨーロッパ、中国、アメリカの各大学出版部との交流や意見交換の機会を得た。具体的には国際交流基金「平成五年度地域・草の根交流欧州派遣事業」の一環としてフランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、ハンガリーの大学出版事情調査（三月）、日本中国文化交流協会・一九九四年出版代表団として北京・杭州・紹興・上海を訪問、北京大学出版社等と懇談（六月）、そしてアメリカ大学出版部協会（以下AAUPという）総会への出席、コロンビア大学出版局訪問・業務打合せ（六月）がそれである。

今日、大学改革が進展し、大学とは何か、大学の社会的役割は何かが問われ、新しい大学づくりが模索されている中で、それに連動して大学出版部の新しい役割が期待されている。また、日本大学出版部協会（以下AJUPという）は昨年創立三十周年を迎え、それを一つの区切りとし二十一世紀へむけての大学出版部運動の新しい方向や可能性の追求が課題となっている。

このように、大学出版部が大きな転換点という局面を迎えている時期に、世界の大学出版部の人々と交流し、その活動状況に接することができたのは貴重な経験といえるかもしれない。ここではAAUP総会の内容紹介を中心としながら、大学出版部が内包している問題状況に迫りたい。

Ⅱ　AAUP総会の風景

AAUP総会は六月一九日から二一日までの三日間、ワシントンのオムニ・ショーラム・ホテルを会場に開催された。出席者は八〇大学出版部に加えて、学術関係機関、印刷・紙などの関連会社、民間出版社、流通関係会社などで七〇〇名を越えた。大学出版部の中では編集・販売・製作関係を担当する若い人々の参加が目立った。女性が多いことは言うまでもない。

総会は「新しい協同関係の構築」を提起し、「学術情報交換の未来は大学出版部同士が新しい協同関係をつくれるかどうか、大学出版部は新しい出版環境に対応できるかどうか」をメインテーマに、四つの全体会議と多くのワークショップが実施された。かなり過密なスケジュールといえる。この間、四回のディナーとランチの会食会が開かれ、

ＡＡＵＰ会長はじめ役員がそれぞれの機会に総会のテーマやＡＡＵＰの課題について発言した。

全体会議のテーマはつぎのとおりである。

①書籍の未来――デジタル化は学術出版、とくに人文科学、社会科学分野にとってどういうことになるのか。また、このことによって出版文化、研究活動、学術出版の役割、そして読むこと自体がどう変化していくのか。

②知的所有権問題の将来――学術情報交換の新しいメディアであるインターネットの飛躍的な発展と大学、図書館をおそっている経済的危機があいまって、コピーライト自体、その規制が新しく問題となってきている。コピーライトの基本的原則、概念の変化、妥当な使用方法、そして新しい出版環境のなかでどう考えるべきか。

③図書館＝出版部間の情報ネットワークづくり――図書館は学術研究の場として、出版社と協同して、また独自に変化していかざるをえないだろう。

④会長フォーラム――ＡＡＵＰの組織上の問題について質問にこたえる。

また、ワークショップはコンピュータ時代における原稿編集、雑誌の製作・販売、ＤＭの役割、総合目録の発行、書評掲載の方法、デザインと印刷、電子出版等が実施された。

そして、ＡＡＵＰ総会の最大の関心は出版と情報に関するニュー・テクノロジーの可能性の問題に集中した。学術書に未来はあるのか、電子出版の見通しはどうか等である。ただ、これらの議論が学術書出版の「行き詰り」とその代替としてのニューメディアへの「過大な期待」が前提になって展開されている点が大いに気になるところである。その点で、総会はＡＡＵＰの現状の「行き詰り」を自ら示す結果になったといわざるをえない。

会食の際、隣りの席の有力大学出版部の編集長から、学術出版の将来について「no future」という返事がかえってきた。このことに象徴されるように、アメリカにおける学術出版とくに少部数の書籍出版のここ数年の「行き詰り」は深刻のようだ。学術出版の担い手としてのＡＡＵＰの輝かしい歴史と伝統はどこへいこうとしているのだろうか。

Ⅲ　ＡＡＵＰの存在

ＡＡＵＰの設立を辿れば一二大学出版部グループが幹事長を選出した一九三七年にさかのぼる。が、正式には一九四六年、シカゴにおける年次総会で二六大学出版部五八人が参加し、ＡＡＵＰを設立、会則を採択した。その目的の第一に「学術研究成果の普及を助けること。そしてその目的を達成するため、大学出版部の発展と学術書の流通を、国内・国外を問わず援助すること」とうたっている（『大学出版部』Ｇ・Ｒ・ホウズ／箕輪成男訳）。大学出版部が活動を始めた時代にはアメリカにおいて商業出版社による一般書籍の出版はすでに確立されていた。アメリカにおけ

る大学の興隆そのものから発展した大学出版部は当然のことながら学術研究の出版が活動の中心を占めてきたのである。

現在、加盟校は一一四大学出版部。東京大学出版会は日本で唯一の海外会員である。ＡＪＵＰの設立は一九六三年だが、設立にあたってはもちろんのこと、以後今日までＡＡＵＰの活動から多くのことを学んできた。ＡＡＵＰの活動の足跡を追っかけてきたといっていいかもしれない。一九八二年には日米大学出版部協会共催、丸善とアメリカンセンター後援により「日米学術出版の状況と課題」をテーマに公開コンファレンスを開催した。いま、大学出版部が転換期に直面して十数年ぶりにＡＡＵＰ、ＡＪＵＰが協力してシンポジウム開催の計画を検討中である。

Ⅳ　学術出版の可能性

表１はＡＡＵＰのここ数年の書籍の新刊点数とアメリカ全体の新刊点数を比較したものだが、ＡＡＵＰの新刊刊行点数は一九九一年をピークにここ二年は大きく落ちこんできている。また、アメリカ全体のピークは一九八八年にあり、九〇年には前年比で実に約八〇〇〇点が減少している。ＡＡＵＰの全米に占める比率も九一・九二年をピークに確実に低下傾向にある。

大学出版部の発行する書籍は大学図書館の購入が頼りだが、それが大分前から変化してきている。「全米の大学図書館のうち何百かが買ってくれる保証があれば最低の販路は確保できる。しかし近年学術誌がべらぼうにふえたうえ、二重価格制度で図書館には個人購読者の二、三倍の購読料を課すので、学術誌の購入が急激に図書館購入費の大きな比率を占めるようになった。その結果、書籍の購入数は絶対的に減少している」（『アメリカの社会と大学』佐藤和夫著）。この傾向が一段と進行してきていると推測できる。

アメリカ大学出版部は学術書出版を業務の中心にしてきたが、経済的には政府その他の補助金や寄付金を頼りに、また販売面では図書館を頼りに出版活動を行なってきているが、これらへの依存を極力排除し、自立した組織体としての基盤づくりを目ざすこと

表１　ＡＡＵＰの新刊刊行点数

年	ＡＡＵＰ点数	ＵＳＡ新刊点数	ＡＡＵＰ／ＵＳＡ×100
1988	8,388	44,893	18%
1989	9,564	42,922	22%
1990	9,753	34,933	27%
1991	10,290	38,041	27%
1992	9,093	38,912	23%
1993	(8,143)*	（未発表）	—

＊　最終データではない．ＡＡＵＰディレクトリーから中陣隆夫氏が計算したもの

が不可欠ではないか。そのためには、教科書・教材や教養書、一般書を刊行して経済的基盤を自力で確保する努力が必要である。そのような出版部も存在するが少ない。同時に、「学術書は売れない」という前提でなく、魅力ある学術書は研究者だけでなくその周辺の読者をも獲得できるのは確実で、もっと「売れる学術書」づくりに執着することこそが重要ではないのだろうか。

その点では中国の大学出版社の活動に学ぶべきところがあるかと思う。北京大学出版社は社会制度その他の条件が違うとはいえ、総合出版の道を追求している。優れた学術出版を中心にして、世界のトップレベルの研究の翻訳出版、大学教育に欠かせない教科書の刊行にも積極的である。さらにニューメディアへの関心も強い。独自で音像出版社（ビデオほか）を経営している。

また、ヨーロッパはその点では後発で、政府その他の補助により大学出版部が自立して出版活動を行なっていく段階である。少部数の学術書の刊行を実現していくことが当面の課題となっている。現状では補助金なしでは成り立たないが、今後どう発展していくのかを見守りたい。

ＡＪＵＰは設立趣旨にあるとおり、「研究成果の発表としての学術書の刊行、効果的な教育を授けるすぐれた教科書の出版、および研究成果の社会への普及をはかる啓蒙書、教養書の刊行」を基本任務としており、それぞれの出版部が工夫しながら出版活動を行なってきている。表2はＡＪＵＰの新刊刊行点数と出版界全体の新刊刊行点数だが、比率は小さいものの、ＡＡＵＰと違って刊行は着実に上昇傾向にある。

表2　ＡＪＵＰの新刊刊行点数

年	ＡＪＵＰ点数	日本新刊点数*	ＡＪＵＰ／日本×100
1989	647	38,057	1.70%
1990	581	38,680	1.50%
1991	599	39,996	1.49%
1992	652	42,257	1.54%
1993	716	45,799	1.56%

＊　出版科学研究所データによる

大学出版部はそれぞれの国によって成立過程も活動の目的も多様だが、大学が研究と教育の場である以上、それに対応してそれらの成果を出版の形で結実させるのが大学出版部の最も基本的な活動ではないのだろうか。その点でいえば、ＡＪＵＰはまだまだ極めて不十分ではあるが、世界の大学出版部の活動と比較して決して見劣りしていない。むしろＡＪＵＰの今後の出版活動は世界の大学出版部から一層注目されることになるだろう。

定年と趣味

高野　昭吉

「年金生活者」というと、定年退職後、日がな一日盆栽でもいじっている老人を思い浮かべ、その言葉の響きはなんとも寂莫という感じで好きではないが、好むと好まざるとに関らず、そういう団塊の世代に入って早や四年が経過してしまった。

四年前までは小生がそうであったように、現役で働いている「給料生活者」のほぼ四人か五人の保険料で年金生活者一人を支えていて、自分も間接的にせよ年金財政上、社会的に貢献していたと自負していた。将来、高齢化社会の進む一〇年先には、三人の現役で一人の年金生活者を支えていかなくてはならないといわれている事を思えば、まさに〝私払う人〟から「私貰う人」に立場が逆転した訳であるから、自分の年金受給が当然の権利であることはさておき、毎月、保険料を払っている現役のサラリーマン諸君には、素直に感謝しなくてはならない。

元来、仕事ならびに労働自体は好きな小生であったが、フラストレーションのたまるサラリーマンという管理社会に疑問を感じ始めていたこともあって、還暦定年をむしろ欣喜雀躍と迎えたことであった。さまざまなしがらみや束縛から解放され自由になる、そして好きなことをやって生きていく、これぞ熟年世代の特権であると思ったからである。

もともと週末が待ち遠しいほどの〝釣り〟大好き人間で、定年退職後は、海であれ川であれ、はては山奥の渓流にさえも思う存分に行ける身の上になるかと思うと、思わず定年万歳!!　と叫んだくらいである。

ところが、いざいよいよ現実にその境遇に身を置くようになってみると、嘘のようにあの釣行前日の期待感とか躍動的な心のときめきが失われているのに気がついた。一体これはどうしたことなんだろう。考えるに、人間、抑圧された状態での欲望は殊更強く、フリーな状態での欲望はなんとも弱いものであるということを今さらながら感じた次第である。

とはいえ、釣りに無縁になったわけではなく、たまにはブラッと手近に出漁することもある。今春のことである。交通上の便がよいこともあって、ヘラ鮒釣りで有名な印旛沼へ乗っ込みヘラの大釣りを期待して出かけてみた。しかし、すでに乗っ込み時期は終了していたとみえて、すがすがしい大自然に身を置くことができたことに満足しただけで残念な釣果に終わったのであるが、ここで一風変わった人に出会った。小生と同年輩のその人は、とてもサラリーマンとは思えないが、服装はともかく、ベテラン釣り師の風格を感じさせるものがあった。

釣り場情報の交換の後、自ら喋り出したその人は、ヘラ鮒釣りが何よりも大好きで、とうとう家庭を放り出し（あるいは放り出され）、印旛沼に住みついてしまったのだそうだ。「俺はあそこに寝泊まりしてる」と指さす方を見ると、屋根にはトタンを乗せ石塊で飛ばないようにしてあるだけのいかにもお粗末な掘立小屋があった。どんな生き方をしているのか、特に生活費が気になる。年金生活？　貯えの消費生活？　それとも週何日かのフリーター生活？　数々の質問したい事柄はあるが、それ以上たち入って聞き出すことが憚られた。とにかく、好きで自らこの境遇を選んだのだから悔いはないとのことである。

最近盛り場周辺地下道の〝ホームレス〟が社会問題としてクローズアップされたりしたが、ここなら段ボールハウスの生活よりは数段勝っており、東京都から締め出され、排除される気遣いはなさそうである。趣味もここまでくれば脱帽である。

趣味といえば、還暦を自ら祝って始めたゴルフも五年目を数えるに至ったが、練習熱心な割には一向に腕が上がらない。ただ偶然性とか自然との同調感とか没我状況に入れるという点では、釣りと似ていて面白い。ハンディが下がりはじめる年頃に始めるのではなく、もっと若いうちから始めておけばよかったと思いつつも健康保持が大目標なんだからと己を無理に納得させている。ゴルフを始めてから、現実に肩こりが解消したのは顕著な効用で有り難い。釣りに費やしていた時間が、大部分ゴルフに向いたのは果たして良かったのか？「凝り性」という言葉があるが凝り性と好奇心がある限り定年後の人生に飽きはない。

ブックストアを覗いてみると、定年退職後の生き方について結構な数の単行本がでていて、数々のベストセラーを生み出してきた多湖輝氏（千葉大学名誉教授）の本が目についたので拾い読みした。小生なりの結論は次のようにまとめられる。

所謂、仕事一筋の会社人間で働きどうしだった人が、あっという間に定年を迎えなにもすることがなく、これといって趣味がない、むしろ仕事が趣味だったという人に限ってなにもする気が起こらない。これでは老化が進むだけで感心しない。精神面・肉体面でこれからどう過ごせば良いか、中高年世代の生き方をどうとらえるかで、その後のライフスタイルに大いに影響してくる。あらゆる束縛や肩書きから解放された自由の身を、新しい人生にチャレンジすることだと認識すること、定年は人生のゴールではなく、長い人生の第二のスタートでもあると説いているが、まことに我が意を得たりといったところである。

釣りやゴルフが出来るうちは幸福である。何にでも好奇心の強い小生にとって、これ以外の趣味が出てくる可能性もまだ残されている。これから後もただ漫然と過ごすのでなく、自分の人生をいかに大切に生きるかに気を遣いたい。

大学出版部ニュース

昨一九九三年は大学出版部協会30周年記念の年でした。記念事業として、協会『30年の歩み』（一万部）と加盟出版部の刊行書約七千六百点を収録した『総合図書目録』（二万部）を刊行し、学術専門書の普及促進を目的とした「記念ブックフェア」を開催しました。

この「記念ブックフェア」は営業部会が実務を担当して、一九九二年十月から九三年六月までの長期間にわたって、全国の大学生協書籍部と大学内の書店、さらに一般有力書店あわせて一六八店舗の参加により開催されました。

過去15周年、20周年、25周年、そして今回の30周年と五年ごとに「記念ブックフェア」を開催してきましたが、毎回、前回を超える実績を上げてきました。「30周年記念ブックフェア」の実績は約一億七千万円余、冊数で五万三千冊余でした。25周年の実績と比較して金額で51%、冊数では26%強の増となります。学術専門書・教養書の売行き低迷が叫ばれている昨今の状況からみると、この数字は好成績として評価できるでしょう。

その主な要因は各出版部の活動が年々活発になり刊行点数が増えたこと、さらに『図書目録』の活用（カタログフェア）と現物展示の併用で開催店舗が増えたことにより「読者と本」の出会いの場が拡大されたことにあると思われます。この場を借りてご協力いただきました関係各位の皆様に感謝申し上げる次第です。

三省堂本店にて

北海道大学図書刊行会

▼中村健之介他編『宣教師ニコライの日記』（ロシア語原文、露英日解説付、B5・三〇九〇〇円、日生財団助成）。ニコライは一八六一年に来日し、五十年間の宣教活動の後、一九一二年日本で没した。神田駿河台の「ニコライ堂」にその名を留める。日記は、関東大震災時に失われたとされていたが、中村健之介北大教授により、一九七九年、サンクトペテルブルクの中央歴史古文書館で発見された。以来、手稿の判読を手始めに、十五年かけての刊行となった。明治初期の日本各地での宣教活動の記録は「社会学者のフィールドノートを思わせる内容」にもなっており、また日露戦争前後の記録は圧巻である。本書は第一級の一次史料であり、とりわけ日露交流史、日本キリスト教史は再考を迫られることとなろう。

聖学院大学出版会

▼日本人は特別のことがなければ、アジアをみていない……日本の商品や資本が流れ出し、日本製のトランジスター・ラジオやオートバイが至る処にあふれているアジア。それに伴って経済活動に従事する日本の商社マンとその家族などが、香港、シンガポール、バンコックなどに二万、三万と住んでいる。だが、それらの人たちの目と心は、いずれかと言えば日本の方に向いていて、アジアに注がれているとはいえない。まして、大部分の日本人の目は特別のことがなければ、アジアを見ていない。

▼隅谷三喜男『アジアからの問いと日本』を近々発表します。ここ一〇年、経済的に大きな変貌をとげる、かつて日本の占領下にあった国々の経済・政治状況、また人々がどのような悩みを持っているかを報告します。

慶應通信

▼このたび、小社既刊の『福翁自伝』（現代かな・常用漢字）を全面的に改訂して、『新版・福翁自伝』（定価一八〇〇円）として発刊した。本書は、福沢研究の第一人者富田正文氏（慶應義塾大学名誉博士）の優れた校注により広く声価を得ていたが、今回の新版は福沢研究の最新の成果を加え、また福沢への理解を更に深めるため、富田博士が従来の注に倍する新注を加え、更に版型・文字を大きくして読みやすく組み直したものである（四六判三九〇頁）。

富田博士は一年前に物故されたが、その絶筆ともいうべき、本書の随所に盛り込まれた懇切な注は、一般読者の理解に多く資するであろうとともに、福沢研究を志す識者にとっても、貴重な資料として大きく寄与するものとしてお薦めしたい。

産能大学出版部

▼社会システムにおけるパワーには、破壊パワー、生産パワー、統合パワーがある。破壊パワー中心の混とんの中にある現代社会から、いかにして21世紀の統合化社会に向かうのか。『権力の三つの顔』（四六判、三〇〇〇円）は、著者ボールディングの遺作であり、人間の集団と統合という、古くて新しい問題を追及する、著者生涯の集大成である。

▼『市場対応迅速型の新製品開発マニュアル』（ヒンメルファーブ著、四六判、三五〇〇円）は、AT&T、モトローラ、3M、NCR、トヨタ、松下等、百社以上の企業が実施している新製品開発法を多面的に分析し、実践的に体系化・マニュアル化した書である。新製品開発サイクルを大幅に短縮するツールや技法体得に最適である。

中央大学出版部

▼所雄章編『Les Textes des《MEDITATION》（定価一〇三〇〇円）デカルトの形而上学的主著の『省察』について二版本を復元しつつ、併せて初版本、アダンタヌリ版とのテクスト的な異同を、網羅的に探索することによって、デカルト哲学研究を一層推進させるための資料的基礎の整備を企図した学界注目の書。

▼W・B・チャン／有賀裕二監訳『時間と変化の経済学―シナジェティクス入門』（定価三九一四円）伝統的経済学が行って来たような迷惑なもの、一時的現象とみなしてきた、経済動学の多様性と複雑性の源泉としての非線形性と不安定性等を追究する。これまで分散していた「必要不可欠な基礎知識」が一堂に集められ、カオスの理論やゆらぎの理論を全体的に見通す「一大鳥瞰図」が初めて与えられた。

玉川大学出版部

▼許田倉園監修／石川晶生・梅木信一『生命と自然―ライフサイエンス入門―』（二四七二円）生命、人間、社会を総合した幅広い分野・ライフサイエンスの中から、植物を中心にヒトと自然の関わりを図解とともに解説。

▼機関誌「全人教育」より一流の方々の教養あふれる講演・講話を精選した「玉川学園教養シリーズ」（各定価一五四五円）にこのたび新たに以下の四冊が加わり、通算一四点となった。『世界のなかの日本』『政治と経済を読む』『技術と想像力』『学ぶということ』

東海大学出版会

▼地学団体研究会編集『新版地学教育講座』（全十六巻）

本講座の前身にあたる『新地学教育講座』は今から十八年前に刊行されました。幸いにも好評をもって迎えられ、十六巻全体で約二十万部の普及がなされました。この二十年たらずの間に「地球環境問題」も大きく取り上げられるようになってきました。身近な問題から、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨の被害など、このような問題を正確に把握するためにも、総合的で歴史科学的な側面をもつ「地学」の普及は一層重要であると考えています。そのため、内容を一新した全十六巻の『新版地学教育講座』の出版に着手することになりました。

一九九四年九月より、隔月二巻ずつ刊行予定。（A5判・各巻二五七五円）

東京大学出版会

▼20世紀のアジアを「歴史」「構造」「比較」「関係」の各側面から総合的に捉えようとする試みである『講座現代アジア』全4巻（山田辰雄・渡辺利夫監修）が刊行を開始した。（各巻定価三九一四円）

20世紀末に至って世界各地で噴出した諸事象は、近代社会の多くの矛盾を明らかにし、普遍主義として提示された西欧起源の近代社会科学の問い直しを迫っている。そのようななかで、急速に発展しつつあるアジアの地域研究から導き出される社会法則を一般化することは、新たな社会科学の創出に大きく貢献する可能性を秘めている。

本講座は、歴史のダイナミズムが20世紀を全体として見渡せる地点におけるアジア研究の深化と学際的統合の成果である。

東京農業大学出版会

▼田村正人著『植物保護学』（定価一二〇〇円）

著者は、短期大学部環境緑地学科の教授。環境緑地学科は、ソフトな生き物を基調に、「緑地計画学」、「環境植栽学」、「植物保護学」を三本の柱としている。教育の理念は、知と徳と技のバランスのとれた中堅技術者の育成で、生命を育み、人間と生き物が共存できる緑豊かな生活環境の創造を目標にしている。

本書は、短期大学部授業のテキストとして著したもので、従来の作物保護学、森林保護学、造園保護学の統合を目指したものである。

内容は、食物保護学の重要性、食物の病気、病害虫の異常発生、病原体と特性、病害虫の適応と進化、農薬の安全使用等となっている。

東京電機大学出版局

▼今年の夏は異常なほど暑かった。夏にふさわしいイベントといえば各地の夏祭りや花火大会があるが、最近、これにソーラーカーラリーが加わった。

ソーラーカーは文字どおり、屋根に載せた太陽電池に光を受けて走る電気自動車である。充電型の電気自動車は排気ガス対策にはなるが、結局、石油、石炭といった化石燃料を燃やすことで得る電気エネルギーを消費している。資源の枯渇や環境問題の点から見ればソーラーカーが一番理想的といえるが、問題は太陽電池の変換効率である。

以前、「地球にやさしいソーラーカー」を出版したが、同著者がこのほど太陽電池の入門書を執筆した。無限なまでの太陽エネルギーをもっと利用したい。『はじめまして太陽電池さま』（藤中正治著、定価一三三九円）

東京理科大学出版会

一九八四年七月創刊の月刊誌『SUT BULLETIN』は、本年六月号で通巻一二〇号を迎え、「明日をひらく科学教養誌」をモットーに理科大の中堅研究者を中心に編集され充実しています。最近の特集を紹介すると、七月号で物理学校雑誌の時代から振り返って「物理学校雑誌からSUTへ」、八月号「アレルギー」、九月号「ことばの科学」と興味深いテーマが並んでいる。便利な年間予約制度（年一二回五八〇〇円）をお奨めします。

法政大学出版局

▼森村敏己著『名誉と快楽――エルヴェシウスの功利主義』が第十一回（一九九四年度）渋沢クローデル賞・藤田亀太郎特別賞を受賞。六月十三日、日仏会館理事長・駐日フランス大使らの出席のもとに、パレスサイドビルで表彰式が行なわれた。

本書は、道徳の徹底的世俗化を謳う独自の功利主義思想を展開し、利己心と名誉心の両立に基づく社会を模索したエルヴェシウスの奢侈論争を背景とし、同時代の思想的交流を跡づけながら、その道徳哲学、政治・経済思想を検討した力篇である。（A5判上製・定価五一五〇円）

エルヴェシウス

大学出版部ニュース

放送大学教育振興会

▼月日のたつのは早いもので、気づいてみれば十年の星霜が積み重なる。設立一九八四年。その年の職員8人、刊行百九点、それが今、職員22人、累積刊行点数八百余。事業規模年々拡大中▼協会加入の頃からは「ユニークな学術書」「放送大学教材に人気」などとマスコミにも紹介され、『憲法』『社会学入門』など実売五～十万部の書も続出。日本学士院賞受賞の筑波大学川崎信定教授、生存者叙勲で勲三等の肥田野直教授ほか優れた執筆陣のおかげと感謝▼十年一昔、最近は五年一昔、三年一昔とも。それだけ社会の変動は激しい。過ぎた十年が「十年一日」の連続でなかったかを反省、生涯学習の中核として全国化も近い放送大学へのよりよい教材の提供が、次の十年への課題▼十月十三日、十周年記念パーティを行う。

明星大学出版部

▼大塚寛治著『コンピュータ概論』定価二四七二円

本書は、コンピュータの最近の情報を、特にハードウェアを本格的に学ぼうとする学生のために作られた教科書である。

著者は、コンピュータの学習は、スクラップアンドビルドであり、無駄を承知の上で常に最新情報を概括的につかみ、学習の方向を定める必要があると述べ、そのために本書では、コンピュータとは何か、から始まりコンピュータのハードウェア、半導体素子の構造と性能、コンピュータ動作の仕組み、マイクロプロセッサとパーソナルコンピュータ等、最新のコンピュータのハードウェアの全ての要素を網羅し、学習の方向を正しく導けるように編集した書となっている。

早稲田大学出版部

▼『鉄道時刻表事始め』（小松芳喬、定価四八〇〇円）が好評を博している。図版も多数収載。

▼『スウェーデンの政治』『スウェーデンの経済』『スウェーデンの社会』（岡沢憲芙・奥島孝康編、ワセダ・リブリ・ムンディ、定価各三〇〇〇円）を刊行した。福祉フロンティア国家からの斬新なメッセージを伝える。

名古屋大学出版会

▼佐々木英昭著『「新しい女」の到来―平塚らいてうと漱石』（定価二九八七円）死と神秘の世界を透視した過剰なる女らいてう。謎に満ちたその生に分け入りフェミニズムの核心に触れるとともに、奇妙な心中未遂事件を通して彼女と接近遭遇した漱石の、〝解釈小説〟『こゝろ』に至る女性観・文学観を解読。

▼D・ポイカート著／雀部幸隆・小野清美訳『ウェーバー　近代への診断』（定価二九八七円）優れたナチス史研究を残した歴史家が、ウェーバーによる「近代の病理学」の可能性を展開。

▼奥野信宏・焼田党・八木匡編『社会資本と経済発展―開発のための最適戦略』（定価三六〇五円）一国の社会資本の整備拡充が開発戦略として経済発展に果たす役割を、先進・途上八ヵ国を対象に比較的に検証する。

京都大学学術出版会

▼一九九〇年に Dr. Mark Konishi（小西正一）が国際生物学賞を受賞した。京都大学で開かれた受賞記念シンポジウムをまとめた本を九二年に作った。その中には彼の講演も入っている。

つい最近、岩波新書で『小鳥はなぜ歌うのか』（小西正一著）という本が出版された。鳥のうたに方言があることや、美しいうたを歌わせるために日本では古くから、若鳥に師匠をつけたことなど、あまり知られていない興味深いことにふれながら、小鳥のうたの研究における深い考察から人間の行動や言語の理解にまで迫るという内容で、さすがと思わせる仕上りになっている。シンポジウムの頃は、当会が軌道に乗る前で、彼のこのような本を作る計画を秘かに抱いたが余裕なく過ぎ去ってしまった。感無量である。

大阪経済法科大学出版部

▼滝沢秀樹著『近代日本経済史序説』前近代～現代を通しての「日本経済史の見方」を中心にとくに東アジアのなかでの日本の近代の特質を論じたもの。

▼本学主催の九三年国際学術シンポジウムの報告書（全五巻）『急成長する東アジアの経済と日本の役割』『東アジアにおける労働力移動と外国人労働者問題』『東アジアにおける文化交流の諸問題』『朝鮮の統一とアジアの平和』『東アジアにおける経済開発と環境問題』

▼雷建徳著『面白い中国語』（仮題）『中国の一字書』『面白い―』は、日常用語、文型、詩、民歌、成語、格言等を通して、中国語がぐんぐん身につく速修本。『中国の―』は、短期間に集中的に、漢字、単語、四字熟語等を習得出来る暗誦本。

関西大学出版部

▼丹羽明訳『選択、期待および不確実性―シャックル理論の評価―』（定価五五〇〇円）G・シャックルは経済学の広範な領域にわたって活発な研究活動を続け、とりわけ、ユニークな不確実性の理論や経済学における時間、期待の役割などの研究で知られている。本書は、そのシャックルの不確実性理論の紹介と批判的評価の書である。▼大谷憲司著『現代日本出生力分析』（定価四八〇〇円）は日本における「出生力転換」以降の出生行動を、さまざまな角度から人口学の最新の理論と方法によって多変量的に解析した意欲作である。本書は、四月二十三日の日本人口学会理事会で第四回学会賞に選ばれた。この受賞は、本書がわが国の今後の人口学の発展に大きく貢献すると認められたことによる。

九州大学出版会

▼『中世における農村経済と都市経済』九大経済学部経済史講座とベルギー・ヘント大学文学部中世社会経済史研究室との多年の共同研究の成果。全九章中五章がフランス語、四章がドイツ語で執筆され、書名は両ヵ国語で表示（後掲新刊案内参照）。▼九州農業経済学会編『国際化時代の九州農業』七二一〇円。ウルグアイ・ラウンドにおける農業合意は、わが国農業の見通しを混迷させている。本書は、学会員の総力を結集して、困難な現状のなかで、日本農業の一環として、いかに九州農業の展望を切り開くかという課題に挑んだものである。▼『発達と障害の心理臨床』二八八四円。障害児臨床センターは教育学部はじめ全国の研究者の協力を得て、教育・心理臨床・福祉の分野における今日的課題を検討した。

流通経済大学出版会

いま日本の大学は、今後確実に減少していく学生数を背景に、大学が現在抱えている問題点を洗い直し、新たな「教育研究の場」として、21世紀に向っての変革を迫られている。このなかでも、重要な課題のひとつが「障害者の入学と教育」をめぐる問題である。この課題に対し本学社会学部では、身体障害者の高等教育への受け入れに関する全国規模の調査を行った。調査内容は、国公私立大学の規模別・学系別、障害種類別、入学時の対応、施設・備品・制度・組織などの実態、就職などそれぞれの受け入れ状況を重点において実施した。この調査研究の結果は、「障害者の高等教育に関する調査研究報告書（二分冊・非売品）」に取りまとめて発表している。ご希望の向きは、当出版会まで、ご連絡下さい。

大阪大学出版会

▼宮川清司著『自然と詩心の運動―ワーズワスとディラン・トマス―』（定価六一八〇円）

英国ロマン派の代表詩人ワーズワスの詩の鑑賞と分析を通して、西洋文化の最も重要な概念のひとつである。"Nature"と人間とのかかわりの問題を新しい角度から捉え直す。

ディラン・トマス論では、このロマン主義自然観がいかに変容をこうむりつつ現代に受け継がれているかを例証する。

著者は大阪大学言語文化部教授、主体的な〈読み〉とアプローチでワーズワスの内奥と自然を洞察し、精度の高い硬質なロマン主義研究を確立。

〈近刊〉11月初刊

▼江尻宏泰・櫛田孝司編『量子の世界―物理研究のフロンティア―』（予価二三〇〇円）いま話題のトップクォークとは！

新刊案内 '94・7～'94・9

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会

投票行動の政治学―保守化と革新政党　荒木　俊夫　五五六二円

南千島鳥類目録　V・A・ネチャエフ・藤巻裕蔵　二〇六〇円

New Trends in Neonatal Screening　高杉信男・成瀬　浩編　一二三六〇円

流水の科学者　岡崎文吉　浅田　英祺　一三三九〇円

オホーツクのホタテ漁業　西浜　雄二　三〇九〇円

宣教師ニコライの日記　中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男編　三〇九〇〇円

■聖学院大学出版会

■慶應通信

新版　福翁自伝　福沢　諭吉　一八〇〇円

イデオロギー批判のプロフィール―批判的合理主義からポストモダニズムまで―〈慶應義塾大学法学研究会叢書57〉　慶應義塾大学法学研究会編　八八五八円

Wörter und Wendungen-Grundwortschatz-（ドイツ語基本単語・表現集）―経済・社会関連用語集付き―　井戸田総一郎／八木輝明／七字眞明　一六〇〇円

Japanese Management Features　清水　龍瑩　五五〇〇円

カレッジライフのすすめ　古田　精司編著　二〇〇〇円

変革の時代の組織　唐沢　昌敬　三八〇〇円

現代産業の再構築　(財)経済広報センター／慶應義塾大学経済学部共編　二七〇〇円

「ちご」と「わらは」の生活史　加藤　理　三八〇〇円

■産能大学出版部

情報技術とビジネス・リエンジニアリング　J・J・ドノヴァン／日本DEC訳　二〇〇〇円

この一瞬に自分を変える　D・K・レイノルズ／遠間美保子・小木晴代訳　一五〇〇円

どうなる自動車産業　安田有三・山下雄璽郎　一六〇〇円

権力の三つの顔　K・E・ボールディング／益戸欽也訳　三〇〇〇円

管理者の収益創造力69の鉄則　山口　博康　一六〇〇円

価格・流通激変期のヒット商品学　山田　理英　一八〇〇円

住宅産業のすべてが一目でわかる本　三島　俊介　一八〇〇円

広告の時代の終り　湯澤　明　一八〇〇円

新教程表計算入門　産能短大情報教育開発研究グループ編著　一六〇〇円

新しい動機づけによる経営　S・W・ゲラーマン／木下　敏訳　三〇〇〇円

■玉川大学出版部

生命と自然―ライフサイエンス入門―　許田倉園監修／石川晶生・梅木信一　二四七二円

世界のなかの日本〈玉川学園教養シリーズ(11)〉

政治と経済を読む〈玉川学園教養シリーズ⑫〉　小原哲郎編　一五四五円
技術と想像力〈玉川学園教養シリーズ⑬〉　小原哲郎編　一五四五円
学ぶということ〈玉川学園教養シリーズ⑭〉　小原哲郎編　一五四五円
教育学的に見ること考えることへの入門　フリットナー＆ショイアール編／石川道夫訳　三九一四円
剣道と人間教育　井上　正孝　二四七二円
教育改革　二〇世紀の衝撃　A・フリットナー／森田孝監訳　四三二六円

■中央大学出版部
Les Textes des《MEDITATIONS》　所　雄章　一〇三〇〇円
米国刑事判例の動向Ⅲ　―合衆国最高裁判所判決―　渥美東洋編　三五〇二円

■東海大学出版会
日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説　木元　新作・滝沢　春雄　二二六六〇円
経済発展論―産業革命から情報技術革命まで―　小金　芳弘　二五七五円
サガから歴史へ―社会形成とその物語―　熊野　聰　三〇九〇円
地球環境50の仮説　西岡　秀三編著　二四七二円
堤中納言〈桃園文庫影印叢書〉　寺本直彦解題　二五七五〇円
さかなの街―社会行動と産卵生態―　ジャック・T・モイヤー／中村宏治訳　四九四四円
美術編〈芸術経営学講座①〉　佐々木晃彦監修　二八八四円
音楽編〈芸術経営学講座②〉　佐々木晃彦監修　三〇九〇円
演劇編〈芸術経営学講座③〉　佐々木晃彦監修　二五七五円
映像編〈芸術経営学講座④〉　佐々木晃彦監修　三〇九〇円
川と海を回遊する淡水魚―生活史と進化―　後藤晃・塚本勝巳・前川光司編著　二九八七円
伝送工学概論　岩橋　榮治　三五〇二円
日本産魚類生態大図鑑　益田　一・小林安雅　九七八五円
やさしい気象教室　島田　守家　一八五四円
地球をはかる〈新版地学教育講座①〉　地学団体研究会編　二五七五円
自然と人間〈新版地学教育講座⑯〉　地学団体研究会編　二五七五円

■東京大学出版会
家族の起源―父性の登場　山極　寿一　二二〇〇円
李朝商業政策史研究　―一八・一九世紀における公権力と商業　須川　英徳　七六〇〇円
地中海新ローマ帝国への道　―ファシスト・イタリアの対外政策 1935-39　石田　憲　五六〇〇円
数理統計学の理論と応用　竹内　啓・竹村彰通編　四六〇〇円
人文・社会科学の統計学　東大教養学部統計学教室編　二九〇〇円
アオコ―その出現と毒素　渡辺真利代他編　四六〇〇円
社会情報と情報環境　東大社会情報研究所編　一一〇〇〇円
環境創造の思想　武内　和彦　二四〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇67・68　国立国会図書館所蔵　一六〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇52　国立国会図書館所蔵　一二〇〇〇円

枢密院会議議事録70・昭和篇28　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
薄膜トライボロジー　榎本祐嗣・三宅正二郎　三六〇〇円
薄膜・光デバイス　吉田貞史・矢嶋弘義　三六〇〇円
アジア・北米経済圏と新工業化　大阪市立大学経済研究所・中川信義編　四八〇〇円
バイカル湖―古代湖のフィールドサイエンス　森野　浩・宮崎信之　三四〇〇円
バイオメカニズム12―生体の運動機能とその復元　バイオメカニズム学会　一八〇〇〇円
目でみるリハビリテーション医学〔第2版〕上田　敏　三八〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇69・70　国立国会図書館所蔵　一六〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇53　国立国会図書館所蔵　一二〇〇〇円
枢密院会議議事録71・昭和篇29　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
民法I―総則・物権総論　内田　貴　三〇〇〇円
基礎実験I―物質科学実験A・物質科学実験B　東大教養学部基礎実験テキスト編集委員会編　三四〇〇円
基礎実験II―物質科学実験A・生命科学実験　東大教養学部基礎実験テキスト編集委員会編　三四〇〇円
実験地球化学　飯山敏道・河村雄行・中嶋　悟　三四〇〇円
真空技術〔第3版〕・物理工学実験4　堀越　源一　三八〇〇円
講座現代アジア1―ナショナリズムと国民国家　土屋　健治　二八〇〇円
斧の文化史・UP考古学選書6　佐原　真　三八〇〇円
サルの行動発達・シリーズ人間の発達10　南　徹弘　二六〇〇円
フロンティアと開拓者―アメリカ西漸運動の研究　岡田　泰男　二六〇〇円
近代日本の学校と地域社会―村の子どもはどう生きたか　土方　苑子　六五〇〇円
日本の所得と富の分配　石川　経夫　四二〇〇円
クジラとヒトの民族誌　秋道　智彌　二二〇〇円
Cardiomyopathy Update 5　関口守衛ほか編　二五〇〇〇円

■東京電機大学出版局

はじめまして太陽電池さま―地球にやさしい太陽電池入門　藤中　正治　一三三九円
無線機器システム〈理工学講座〉　萩原・小滝　三九五〇円
ネットワークスペシャリスト試験の徹底対策　佐藤　健編　一七五一円
第2級ハム教室―これ1冊で必ず合格　吉川　忠久　二五七五円
演習電気基礎（上）　電気基礎研究会編　九五〇円
よくわかる電子基礎―電気と電子の基礎知識　秋冨勝・菅原彪監修　二一六三円

■東京農業大学出版会

植物保護学　田村　正人　一二〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

アメリカ演劇7―リリアン・ヘルマン特集―　全国アメリカ演劇研究者会議発行　一〇三〇円
男性同盟と母権性神話―カール・シュミットとドイツの宿命―　N・ゾンバルト／田村和彦訳　四九四四円
ヘーゲル以後の歴史哲学―歴史主義と歴史的理性批判―　H・シュネーデルバッハ／古東哲明訳　三〇九〇円
同時代人ベンヤミン　H・マイヤー／岡部　仁訳　一五四五円

アステカ帝国滅亡記―インディオによる物語―
G・ボド、T・トドロフ編／菊地良夫・大谷尚文訳　六四八九円
迷宮の岐路―迷宮の岐路Ⅰ―
C・カストリアディス／宇京頼三訳　三九六六円
陸奥鉄産業の研究〈森嘉兵衛著作集／第三巻〉
第八回配本　八七五五円
動物への配慮―ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性―　J・ターナー／斉藤九一訳　二九八七円
エコロジーの新秩序―樹木、動物、人間―
L・フェリ／加藤宏幸訳　二八八四円
秘境アラビア探検史（下巻）
R・H・キールナン／岩永博訳　二九八七円
理性・真理・歴史　H・パトナム／野本和幸・中川大・三上勝生・金子洋之訳　三八一一円
想念が社会を創る―社会的想念と制度―
C・カストリアディス／江口幹訳　四一二〇円
神・死・時間　E・レヴィナス／合田正人訳　三七〇八円
政治的正義―法と国家に関する批判哲学の基礎づけ―
O・ヘッフェ／北尾宏之・望月敏孝・平石隆敏訳　五九七四円
意識と自然―現象学的な東西のかけはし―
K・K・チョウ／志水紀代子・山本博史監訳　四四二九円
自然の諸時期　ビュフォン／菅谷暁訳　四九四四円

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・ソフト）
新訂　東西演劇の比較　毛利三彌　二五八〇円
〔教師教育ビデオ教材＝いずれも放送教育開発センター編〕
印刷教材10冊を含み定価各一九〇〇〇円
○「学校・学級の経営」楽しい学級を目ざして(1)係をきめる（50分）
○「学校・学級の経営」楽しい学級を目ざして(2)誕生日パーティー（50分）
○「学校・学級の経営」新学期へのスタート（50分）
○「学校・学級の経営」わが校の国際理解教育（50分）

■明星大学出版部
■早稲田大学出版部
前近代　東アジアのなかの韓日関係　閔徳基　九八〇〇円
近世紀行日記文学集成　二　津本信博編著　一八〇〇〇円
叢書　ワセダ・リブリ・ムンディ　第2期
スウェーデンの政治―デモクラシーの実験室―
岡沢憲芙・奥島孝康編　三〇〇〇円
スウェーデンの経済―福祉国家の政治経済学―
岡沢憲芙・奥島孝康編　三〇〇〇円
スウェーデンの社会―平和・環境・人権の国際国家―
岡沢憲芙・奥島孝康編　三〇〇〇円
水野祐著作集　全10巻
第5巻　非情の世紀　下―壬申の乱外史―　五〇〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ
1　地域冷暖房　尾島俊雄　二〇〇〇円
2　東京の先端風景　尾島俊雄　二〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期　全16巻
第39巻　仮名草子集　谷脇理史編　一八〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇第一期　全18巻
第3巻　杉田玄白集　杉本つとむ編　二八〇〇〇円
第4巻　大槻玄沢集Ⅰ　杉本つとむ編　二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
アメリカ教育の文化的構造　田浦武雄編　二二六六円

社会資本と経済発展―開発のための最適戦略―
奥野信宏・焼田党・八木匡編　三六〇五円
ウェーバー　近代への診断
D・ポイカート／雀部幸隆・小野清美訳　二九八七円
「新しい女」の到来―平塚らいてうと漱石―
佐々木　英昭　二九八七円

■京都大学学術出版会
アルケー〔第二号〕―関西哲学会年報（一九九四）
関西哲学会編　一五〇〇円
環境保全と資源利用システム
久守　藤男　三五〇〇円
Animal Societies—Individuals, Interactions and Organisation
Edited by P. Jarman and A. Rossiter　八〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
九三国際学術シンポジウム報告書（全五巻）　同編集委員会編
急成長する東アジアの経済と日本の役割　一〇三〇円
東アジアにおける労働力移動と外国人労働者問題　一〇三〇円
東アジアにおける文化交流の諸問題　一〇三〇円
朝鮮の統一とアジアの平和　一〇三〇円
東アジアにおける経済開発と環境問題　一〇三〇円

■関西大学出版部
選択、期待および不確実性――シャックル理論の評価――
J・L・フォード／丹羽　明訳　五五〇〇円
現代中小企業論　上田　達三　二三四〇円
ニュース・メディアと世論
M・マコームズほか／大石　裕訳　一五〇〇円

■九州大学出版会
生態学的心理学入門
A・W・ウイッカー／安藤延男監訳　三九一四円
犯罪現象と精神異常
アントニャン&ボロディン／佐藤雅美訳　四六三五円
荷為替信用状の法理概論
F・アイゼマン&R・A・シュッツェ／橋本喜一訳　五三五六円
税務会計研究の基礎　末永　英男　四一二〇円
発達と障害の心理臨床
九州大学教育学部附属障害児臨床センター編　二八八四円
国際化時代の九州農業　九州農業経済学会編　七二一〇円
Economie rurale et économie urbaine au Moyen Age.
Landwirtschaft und Stadtwirtschaft im Mittelalter.
A・フルヒュルスト&森本芳樹編著　四六三五円
イギリス資本主義と帝国主義世界〔第2版〕
桑原莞爾・井上　巽・伊藤昌太編　六六九五円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会
自然と詩心の運動―ワーズワスとディラン・トマス―
宮川　清司　六一八〇円

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1－1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第23号) '94秋 平成6年10月1日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共